

きぬがさ

東近江市立能登川西小学校

学校だより No.16

平成 30 年 (2018 年) 12 月 18 日

やり直しのできる社会へ

武村 節子

2000 年以降の I C T の技術革新は、わたしたちに便利を与えてくれました。そして大人たちの生活と同様に子どもたちの生活をも大きく変えてしまいました。スマートフォンやタブレットの登場は特に革新的でした。それは、実は子どもたちにとっては不幸の始まりだったかもしれません。いつでもどこでも誰とでも情報を交換し情報を得ることができるようになったことで、広い情報より、若者は逆に狭い情報を好み、簡単に視覚的な情報が飛び込むことで、言葉や経験といった人との結びつきが希薄になり、相手の感情を推し量ったり慮ったりする心の育成がされずに、子どもが大人になってしまっているのではないかと心配するからです。

こども きょういく がっこうブック「おそいはやい・ひくいたかい」（ジャパンマシニスト社）の 20 年前の創刊号の特集は「学校でつまづく人生」でした。今年 100 号記念特集は「学校でつまづかない人生」です。発行者が常に子どもに寄り添い、一人ひとりを支えたいとの信念が 20 年間の継続発行を支えている雑誌です。お読みになった方もおられるのではないかと思います。

学校は大なり小なりつまづく場です。つまづかない人生などありません。つまづけばまた起き上がればよいはずなのに、それを困難にしているのは社会なのかもしれません。努力してできることとできないことがあります。先生から「がんばってね」と言われ、親から「もっとがんばってもらわなければ」と言われ、塾からも「がんばろう」と言われれば、どうしてもできない場合、もはや『できなかったという単純な事実』につまづくだけでなく、心のレベルで『期待』につまづいてしまいます。昔の社会なら、たぶん「できるようになるまで待てば良い」「今の力でできる世界を求めれば良い」と気長に考えていたのではないのでしょうか。

さらに、現代は少子化で目が行き届き、手助け中毒と言われています。学校も教育内容が多すぎて、失敗させている時間がありません。失敗の経験が無いので、失敗に不安な子どもや正解待ちの子どもが増えるのも当然です。これからの時代を生き抜く子どもたちには、自ら考え判断し協働して問題を解決していくスマートさと共に、失敗しても何度もやり直せる図太さや、間違っても立ち直れることができるような泥臭い根性もまた必要ではないかと考えるこの頃です。

子どもはつまづくのが仕事です。つまづくことで起き上がることを学びます。どう起き上がれば良いかだけでなく、つまづかない方法や、時には同じつまづくならどんなふうにつまづくのが良いかも学びます。社会がもっとやり直しの寛容な社会になるように、学校もまた失敗に寛容な学校になるようにならなければ、子どもの心身を鍛えることができないと思っています。2 学期も残すところわずかとなりました。3 学期はまとめの学期です。これからも、子どもたちのための教育に力を尽くしたいと思っておりますので、どうか変わらぬご支援・ご協力の程よろしくお願い致します。

良いお年をお迎えください。



【1 年生の算数：写真は本文と関係ありません】